本編忠

本朝世事談綺巻之四目錄

○歳時門

松稿　歳　鳥追

雛　万　百病　生替

蓬餅　走　紙鳶

五月甲　入梅井

盆　六盆

焼　八朔

亀　大晦

十夜　七十二候

陰節季

七夕

東山大文火

住吉松女田植

国月　時鐘　彼岸

○文房門

詩賦　連謌　冠附　扳汗　平假名　三筆　世尊寺流　尊圓流　滝本流

聯句　誹諧　色紙　文字　真名　三蹟　上代　近衛流　堺流

漢和

和歌　前句　短尺　汗假名　顔語　訓語　聖賢蹟　定家流　光悦流　志津ヶ流

畫　圖　土佐流　啓書記　家の書　狩野

金岡　岡文　周文　雪舟流　古法眼　主馬　秋月　相河流　長谷流　浮田流　古法

渡唐像

北殿司　鐵舟　宗舟流　永真　永徳　雪村　能阿弥　松花堂　一蝶流　紅絵

鳥羽絵　墨河弥　曾我流　大津絵　光琳絵

本朝世事談綺巻之四

菊岡沾凉述

歳時

○門松

世談問答 一条摂政 松ハ千代を契る物なれ共 一年の始めに立て飾るべし 夫木 [illegible]

○方歳

六十六代一條院の御時長徳のころ大江定基参河守なりけ[illegible]

子蔵主百蔵主と称し奉り定基は仏教を奉
して横川の源信僧都を尋て一の弟子となる
ことを願ひ僧都是を許し給ひて弟子となる
庄司吉弟重とは重の弟なり

○追

踊り手の遠風なり赤地の近文の麻衣河国の産あ
る数子所の田圃を耕す土民なりて土民なりし武士
あつて武士なりし時高位高官にして三槐
九棘に関あつて富む者きこしめし代に時宗を
招き上人を仰ぐ一とせ三月招き上人は茅屋に会
せり村の土人蔵首礼を長者の家なるをもてその

ひらをもつてくるものの数人あるいはいまだ数
日帰られしよりも遅しと蓋し遅い長者の
門園の雪を踏んだりの鶴出し書を書
き長の須を弄るの年のはじめよりこれを伸
なり唄の番猶に世ばらやまんらよの名代
百代し春の門の雪を踏下し。お長者のみそらへたと
るるいまれあたたかなる遅い沙門
徒へおづくいる程る官面いを長よりしく
なり。けだるよやんでよ。けだるよやんでよ。東西
八子所の門を拝する事を云り

○猶積

世俗に月を猶る事を積を稱

[illegible]

古今大歌所の古歌の中

あつまき年のはつめよりかけそめなれなき
をうらめ　神平拾遺長つの流より新嘗会又後拾遺
祭にも屋形をかりて清門側さしかけをかそまうし
てつむるあり[illegible]を行ひよせてたのきをかそと
[illegible]

○ 走百病　春入

むしの正月十六日より[illegible]十二日をして[illegible]
春秋二[illegible]仕のもの[illegible]日父母の家
[illegible]孝流より流て父祖を承もそして孤獨の長いあて[illegible]
へき舎なし[illegible]薪樵の中[illegible]

五雜組云齊魯人多以正月十六日遊寺觀謂之走百病

○ 出聟

[illegible]二月二日なり[illegible]を生めり陳[illegible]
雲僑新要云秦人[illegible]富貴[illegible]奉家の貧[illegible]
[illegible]
其[illegible]を要む二月二日[illegible]
陳[illegible]貧[illegible]て二月二日[illegible]

○ 雛

敏達天皇二年[illegible]する雛に元[illegible]
[illegible]
女[illegible]の流を[illegible]
[illegible]
[illegible]

源氏　十にあまりある人、ひのかあそびなどする物を
枕草子　とのゝ方にしきりの板にて蓋ひなるあそびの間を

○蓬　俗名母子草　二月始生　莖葉
文徳実録に云有草俗名母子草二月始生莖葉
白脆毎屬三月三日婦女採之蒸搗以爲羹餅傳
爲歳事又云按列子周穆王時西域化人
ようばしゆるとゝ云し通ゝ
永澤寺記云り母懐胎の時死く土中より産
なり成長の後出なり母の墓掘をしてこれを遍
して掘列子に至て幸澤
幸とゝもその示を母子村といひ母の墓を稱
三月三日を歳事とするゝよしなるゝ

○紙鳶
續物志云凡小兒の陽熱に入なる此時陽
の時節ものの紙をいよ〳〵大過きして紙をもて作
花を其中にあざ人なあ
丞のなり紙書を作りて口を平し内熱氣よ洩して
量るとあり　義海集に云春の風に下なり飛揚風い
空中より横ゆ紙書に郎くまを天なり春い解記
裏に記事あるいと

○任吉姫女田植
隈乳母の姫女任吉の渡田をくるゝいつまの帝の
陰摩なるゝ玄女より惡魔の禁ありて移よ玄平玄女

吟じ乞ひ求めし女乃歌の中かゝるし病を治の神よいのるゆゑ曉神祈請して流へよ西を さゝ
偽しき業をなさしめ田植女にすゝ
てかゝる年これをつくもるこ雨稀にしてくれ金く新色
えもあらしけ偽をもて乞ひの植女植女しなのの汗ぬし
又植女屑おしの接蓮の葉の耳を解る事元ちの
しに出でとまるこゝる故郷よりよるよ

○五月甲

光仁帝天應元年 夢古の賊帝朔基る早良親王を
して皇を討しめ給ふ親王薨社の中ろる行く出陣
あり時る五月五月たちまちる神風ふきて賊私之所に
敗走し義をして猶事を治めて五月五日に崇敬傷

○入梅の井

播州矢田郡丹生山田庄東野村に[illegible]
[illegible]井あり清冷[illegible]
梅雨に入[illegible]涌出[illegible]その水口の数[illegible]入梅
の日を定[illegible]

五月雨の花の咲る間に入梅の時節なるゆへ雨の
花嵐と云[illegible]
[illegible]光丸[illegible]人皇十代崇神天皇の御宇
[illegible]時横[illegible]大臣豊城の姫白滝姫を立て
白滝姫一首をよむ

[illegible]

[illegible]

小雨月の稲葉の末の露[illegible]

[illegible]

[illegible]

○盆

云事根源云天平七年始て盂蘭盆を大悟乃職よりそなへあり盂蘭盆と云ハ梵語なり倒懸救苦と翻譯す倒懸とハ餓鬼の苦を云なり

釋氏要覽云盂蘭盆此釋子由孝報恩救苦之要以目連救母爲始梵語盂蘭此救倒懸也盆則此方器也矣

つまり事 十二月晦日ハ祭礼

[illegible]

我行堂[illegible]

六盆の事

報恩經云

二月十五日寅時來　次日午時飯
五月十五日卯時來　次日巳時飯
七月十四日卯時來　次日午時飯
八月十五日辰時來　次日申時飯
九月十六日未時來　次日申時飯
十二月晦日午時來　正月朔日卯時飯

○東山大文字

弘法大師始て[illegible]る淨土寺村叡山寺村の上ノ山に毎年七月十六日高野の土人四百余人松明を燈し聖衆ハ送り火と云七月六日山に入て松木を二三尺八寸如し日に乾

十六日の晩方を撫へ山上より至大の字の跡あり沙法師の
畫せる所なり所くるまの火き穴を穿ちたるなり徴しく凡大の
一字横の一畫其長四十間ほどの炬火十箇條の左堅法
一畫八十間余其間炬火二十箇右の一畫六十八間その間
炬火二十九箇條なり所不潤振ひ所の薪を徴い石のよ積
所時より大を點ち甚だ多し抹茶より甚六月に伐所の薪
語く此事より先年なれハ甚多し崇あり深くなれ情

○燒竈

後堀川院寛喜二年七月十五日夜の嘯より
至る上元中元より燒竈をあり　七月十五日八中元なり

○八湖

後深草院建長二年あり　此年の冬の比

柳表かりくれかくへ人々のとゝ〳〵ける羅山文集云
昔無此儀四百年來特爲佳節又鴨長明方丈記云
俗書なり筆力なかりし事なり

○十夜

十月六日より十八日至

白河の法皇平安末の比
後花園帝永享二年伊勢国員經父子法名を
中興あり又後鳥羽應四年戊辰の年の春山僧
結宗上人勅を願じて京師より入十箇の法會を

[illegible]

○ 八月廿六日　晴

摂津国八木村大坂より北[illegible]

[illegible]中四寸　長六寸五分　深二寸の笠を入て上を五角なる栗を

[illegible]の実の日百[illegible]門寺よりとりくぐ中の実の日大九

村の実中より数[illegible]村の実中数を実者の[illegible]

[illegible]村を除くし[illegible]神の土人[illegible]京師へ[illegible]実の[illegible]

禁裏へ入るそれを[illegible]

[illegible]

[illegible]

○ 大師粥

[illegible]

○ 澤八幡

世俗冬至より[illegible]日の郷のひ[illegible]

[illegible]

○ 節季候

流[illegible]国[illegible]寺[illegible]

[illegible]

○ 七十二候

日比十二時あり　上日比六十時なり[illegible]

十一月廿四日

五日を一候と云一年二十四
五日を以て七十二候となるし三候を一氣と云
十五日二時五刻余しい氣六つの六氣を時とす九十日余
なり時は春夏秋冬し四時と云年なり

○月

天の運動三百六十五度四分度の一なり是則日の三百六十
日なり一氣三百六十日を立て過六日を氣盈と云
一年の間小月六つ三百六十日の内六日の不足を朔虛
と云是不足の氣盈朔虛を合せて十二日なり是を
三年積て三十六日の閏日あり是三年に一度を閏
又一月三十日ありて六日の不足あり是を積て五年に
再閏あり十九年に七閏を立て餘分を一度に一章と云
又閏のある月い節でなきあるて中を一節月の中なる時
は中なる閏月の十五日に節あり其月の一日二日に中あり
それ故閏月を閏と

○時の論

陰陽の數を五つ八つ七つと論へは陽中の陰陽
中の陽とあり陽中の極は日中午刻よりそなたの極は
陰の北あり陽中の陰なり午の刻よりその日の表の
陽なりて九時あり一刻減して八時七時
なりと云しもあり又極まるの刻より明りの日
は陽の北あり是陰中の陽なりまの刻より明りの日の
暮りまて九時あり一刻減して八時七時三時
半夜陰陽のこゝろを觀せしひの調し

又説　子九　丑八　寅七　卯六　辰五　巳四
午九　未八　申七　酉六　戌五　亥四　為陽　為陰

陽は猿の形を撞。陰は虎の形を撞たるなるの時は申の時をもて第一とつなり丑の時ようハハつなり。又午の時は寅の時を第二とつし。おろうハハつて　は統據なり

又説　易の数のよ推し九を陽し六を陰し一陽の始して九を撞し六を撞し終もあり

○彼岸

二月の中を春分と云て昼夜の長短大つこおなしき時節なり　は時日輪天の中道を学天地温和の時なれとも寒流の勢なるゆ御泗して一日の間をたのしむへしなり

文房

○詩賦

天武天皇中三のみと大津皇子は性古はなる達せ一い京中書王。崔神源水。石任の僧虎関禅師

第一かたし　中興之祖

深草僧正遍昭。儒宗道春。石川丈山。墨川道祐

於波點菴。林永昌三。林春斎。宇治宮田的本下水菴

俳諧仁斎　牧ちうきい為ひ仕を又萩生徂徠と沢在

乃清人　光琳　光悦

聯句

この頃姫ゆとして金を石聯句の間よ遠よ

おとは来一。それ者ようあるとうう漢句をもうあるも

○和歌

和歌は神代のむかしより事の風俗にして喜哉遇可美少男喜哉遇可美少女と詠ぜしよりかゝ
又二千一百よとせ過るいまゝの世の人の詠ぜし歌の中に
つゝみなく思ふ心はいかなれば人目をつゝむ袖にあるらん
八重垣の出雲八重垣つまこめに八重垣作る其八重垣を
此歌は神代の書に載たる歌にして歌の道の始なり
按ずるに神代の歌よりあはれなる歌にして日本武尊
甲斐の坂折のくやしやそよ神代の事ぞ思ひ出
珥比磨利　菟玖波瑪須擬底
異玖用加　祢菟流　廷あかみ（やの神祭の
きりさしうるゝ人宮よなりて此の歌をよみかくの風し

八雲たつ出雲の国に八重垣の妻籠に八重垣を作る
いにしへ万葉集の頃のをとこしあるてゝ
代々に歌人いとゝ多くの書に載られて今迄
さくよ乃ゝ弘安のころ和歌の四天王と称せられ
駿河　慶雲　静　新　東好なりゝ
もとゝ　とし　沢　高
わ　は　部　河　ゆ　そ　ま　れ　ま　ん　さ　く　を　か　称
ゆ　ら　よ　高　麦　帰　み　し

梅散客　素

とりつくもいつくしのあらんも立数の梅ならんよりの
道世奏とあるは蕃夷の支陶殿一條禅閤兼良公道遺流教
二条院教九條殿九條殿公道禅龍公鳥丸光賀つ天子よ

後水尾帝 後西園帝 霊元帝 東山帝 桜町帝 桃園帝 後桜町帝

古今集の伝授は中古東常縁より祖より宗祇法師
道遥賢淳に授る 摂関流は二條流実淳より二條家中院通茂
法印八條家中院通茂 烏丸家 おはぐる
堺伝授 云は宗祇より 杜甫花より 伝書 新伝 秘伝
伝授 云 奈良伝授 云

○連歌

日本武尊の御時 はぐくばの御孫を起りとする
上古連歌の神は日本武尊なるを崇む故あり 應安の
頃より天満宮を崇む 連歌宗匠の始 廟を
崇敬 国良基公は免許を受 侍従宗匠より
二代目 増山殺 古今 紙宗祇 宗長

故頃宗長 桜町 元宗 牧宗 類 新在 歴代の宗匠
なり 甚不 曉 魏當 牧原 かなる 酒井長晴 云
達人なり 閑桂 紹巴 今の御 連歌師 之
予 誹諧 後錦 編集の御 或連歌師の云 歌宗匠の
始 侍 云 宗御 紙 我 この 云 年 こころ
宗祇 紙 侍従 宗祇 時代 の人
宗御 おかれ 人 暮 歴代の書を 云 疑
歴代の書を 云 宗御 侍 云 應安 のこころ
て 丸 のこころ 侍 云 紙 時代 の人
元百年 も 前の人 しあ 紙 のこころ
今 云 解 もの

○誹諧

始り万葉連歌より連歌師の業となりしなり
誹諧をなめるべからざるの長官宗祇はじめの人なり宗祇
は宗鑑時代のひとなり連歌師し誹諧宗匠のもと兵
庫長年中九條殿心ゑ迎偉龍と云ふ御免状を受
て水貝流よりはじまる貝流は連歌の法式を規矩にして
誹諧の式法を立るなり連歌は誹諧二流となりて貝流
門人野口左圍門松に童形奏京貝室北村季吟
鶴冠井今徳宗因柳葉一雪荻野安静馬場宗明
末吉道節鶴氏定重正由宗因宗因しはじめ
都蔵俊元石田未得高信玄札木宗因のはじめなり
はまぐりの宗因連人綾瀬る洋なりとて賤

前句謝 延宝のころのはじまる寝覚草の謝なりとて
元禄八年しばらく京師あり事新
冠謝 元禄の末宝永のはじめなる

○色紙

孝謙天皇より短尺と報と拾遺之

○短尺

庭花相国義満公不破の屏
根板より被うて京人おうぎをひらはしまと
いへる志れとをたそのむしあるを桂紙
なるをとをとはりの去月日よりのさんのうの
さんとかこれをうち書ひしなる中ゆ
世事談くるよう侍りんとの心そうとかとの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四行教

下上教

四行七連散

紀友則

小大君

○梅行

元久の頃選擇集を梅の下に書いたるものとて梅の書籍も梅の下義國の兵火よりまぬかれ慶長寛永の頃の梅の枝にて慶長寛永の頃の梅の枝にて

○文字

神代の文字なし木を割縄をひきひきて物をつたふ日本紀纂疏又古代拾遺の序に云上古之世未有文字貴賤老少口口相傳

○大和假名

吉備大臣神記音韻を通術感徳天平勝宝年中大和の都よりなのこと五字の点画を有百て所假名五十字を作るなり本朝にのみあり又入唐の使の沖縄とゝのへノレの三字なり同其三字をとる

五音縱横相通の圖

清	阿 ア	伊 イ	宇 ウ	江 エ	乎 ヲ	喉音 土
濁	カ カ	幾 キ	久 ク	氣 ケ	已 コ	牙音 木
濁	佐 サ	之 シ	須 ス	世 セ	曾 ソ	齒音 金

濁	多 タ	千 チ	爪 ツ	天 テ	止 ト	舌音 火
清	奈 ナ	仁 ニ	奴 ヌ	子 ネ	乃 ノ	舌音 火
清濁	半 ハ	比 ヒ	不 フ	久 ヘ	保 ホ	唇音 水
清	末 マ	三 ミ	牟 ム	女 メ	毛 モ	唇音 水
清	也 ヤ	伊 イ	遊 ユ	江 エ	與 ヨ	喉音 土
清	良 ラ	利 リ	流 ル	礼 レ	呂 ロ	舌音 火
清	和 ワ	井 ヰ	宇 ウ	惠 エ	於 オ	喉音 土

アワヤ喉 サタラナ舌ニカ牙 サ齒ヲハ唇ノ舌ハ唇の転重

○平假名 いろはの

沼澤大師の作なり平ハ本易の義を以て

神記乃四十七言を以て大和假名をやりくむ

末代に至て平易世の至宝なり万葉集の哥
をいはのしひろまりたる古今集の序に
なぞらへ和歌の道をしるし蓮中抄云いはく人無言の
後命前を作り東西の空海波城作今作大日乃化身
式出よ云ひ絶非し空海一作大日乃化身
称ぜ人の毛式の半を知て作るべきあるべ
とて云いはく和語の本源を草字に書て
経文乃要句を合てその意を述らるべし

色葉雖艶散失留逢我
世誰曽将常在有為乃奥
山今日越天浅夢不見
醉もも不為

真名漢字をいふなり源氏物語の巻々まんなかのなり
みちびきなりいんかいきもあるまで御ものあれ
歌語詞語唐土い歌詩なるまでもあるまでもあれ
色葉ぬ草仮名作語なれば作語なれば
通用せり心は四十七字なれば草仮名作語
作語なり文字二十四あり二字合て一字となり
切合四十八字なり通用せり
五十字なり。歌語云いなりよりさんなりその
心解なり故に語文も句歌のを部ていそ乃
意義とみなしみ字仮尽くこと義を主るくしまる
作語云いその意義詞のうへあるにはあり
なりみなり仮なり用いるものしみなり仮人ことを

紀貫之、光孝中興の御代とし
京極黄門定家卿の筆蹟なり
青蓮院尊圓親王　伏見院の皇子なり　高僧
開祖僧正慈道以来代々筆法を継ぎ
る秀逸也　特に傑出
る慈鎮和尚　親王　
ちのく書蓮院代々皆其一流
近衛流　近衛関白信基公　一名信尋　信尹　號三藐院大山
其頃京都三筆と称ス　大山公　光悦　駿河
光悦流　本阿弥光悦　光悦法師小倉山峯の
地を開く　此地に板倉伊賀守の宅地
弱命を蒙る　光悦所　公　舟橋

上代流
定家流
教覚流
聖賢蹟
世尊寺流
三筆
三蹟

行成——行経——伊房——定實——定信——伊行
伊経——行能——経朝——定房

後嵯峨帝
小野道風
弘法大師
弘法大師
小野道風
菅家
倶馬の楊遠勢
大納言行成
参議佐理
沙門の流

なり爰の大虚菴を建る光悦引渡ひ有よ葬これ
よく光悦寺とよく日蓮宗なり

滝本流　八幡瀧本坊　松花堂式部卿昭乗の筆
渋なり又画圖を善ス

堺流　夢菴牡丹花肖柏筆賛し宗列堺に住ス

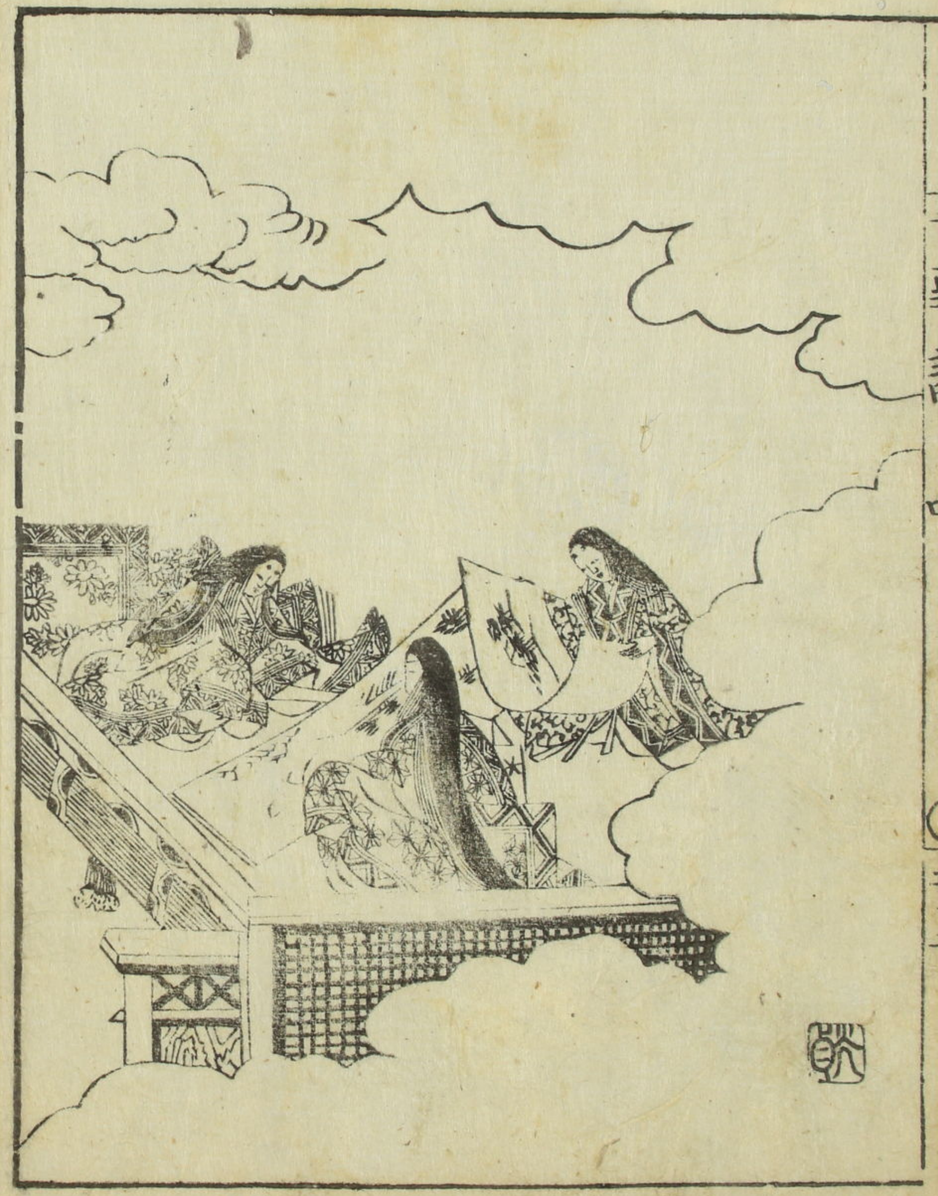
志津ヶ流　京住こ木志津ヶ筆渋し寛文延宝の頃の人。
加茂の社家茂太甲斐の一人し甲斐い安雖ども能筆なり

洛外　通村流二楽流　香類流宗祇流宗鑑流俳門流松流
本因流玉置流僧悦山僧心悦洛の荒木是水紅白雲州
君井休哲誓和尚の僧書長崎の道栄松坂井出正水
東都一品公雑宮遠山北湖深之る画加多麦宰相兼佐木
玄龍石川柏山現八岡林竹細井廣澤荒井得水僧東湖

伯耆山ヶ川書記家能筆多く流行ス

畫圖

姓氏源○云二十二代雄略帝の時男鞍と云人畫巧善ス
日本紀云三十二代崇峻帝元年百濟国より畫
工白如しとの事
巨勢金岡八中納言巨勢野足の子本朝の名画なり
清和陽成光孝宇多醍醐の五帝よりの大納言
紫宸殿賢聖の障子今国始て畫
僧明兆吉山東福寺大道和尚の法弟子し
兆殿司と云清涼の人なり東福寺の涅槃像を圖
横三丈六尺竪三丈九尺くし昔の下る数百十五年六月日
明兆筆とあり



土佐流

土佐光信 ハ最ヲ氏ヒシ墨ヲ代土佐ノ代ヲ官ヲ任ゼ故ニ倍ク土佐ヲ以テ氏トス

藤原經隆 土佐守従五位下 御繪所之元祖

行光 越前守 延文六年爲繪所

光重 越前守 明德元年爲繪所

廣周 土佐守兼彈正忠 永享十一年爲繪所

光信 右近將監 任刑部大輔 四品 爲繪所 倭畫ニヲイテハ此人ヲ以テ妙トス亦連哥ノ達人

光茂 右近將監 任刑ア大輔 兼土佐守正五位下 和州當麻寺中將姫ノ緣起ヲ画ノ風情有餘其規矩ヲ世ニス

土佐光益 土佐經光 土佐刑部 皆爵なり

僧周文　春育と号す　相國寺の僧なり　如拙よりまさる
して名画なり　雪舟宗丹もまさるよし　伝
僧鐵舟和尚　妙澤和尚ともよる夢窓國師の法嗣
なり　絵をよくす

啓書記　祥啓と云　縁金建長寺の僧　下野の人云

雪舟流　僧雪舟　諱は等楊　備後産　禾元山主
とも称す　赤濱の産　小田氏の人なり　中年相模に
あり　画は如拙周文の弟子　寛正年中に
大明に渡り四明天童に登り　大明
の君臣とともに其美を極せり　洛八十村路通の云
渡唐天神の霊像は雪舟より彫刻し書画入明の
時明帝雪のつもる舟を夢むいづくの舟ぞ

彼の日本の舟なるべし　而後雪舟明朝に至
その名帝の夢と比してたきるを感ず　又明の画師
仙仲化　孫詩とも云　雪舟と同　云日本に菅丞相
とつくりあり　舟答て日本の聖なるべし　なんぞ
化言て部先年夢中に一枝の梅を折る
翁よ　其人を問　舟答て日本の菅丞相なりと云
人躰常に変して毅　其像を雪舟模し畫とす
其像を雪舟模し　その舟の画を明朝に
仙仲化　彼の像を写す　日本朝　拾遺
渡唐の神像は　あなり　菅神唐へ渡り給ふ
ハ　あるとも　菅神
あるとも云　かの仙仲化　出雲の像　渡唐の

宗丹流　小栗宗丹は周文の弟子なり俗名を氏
中年より相國寺に入り僧となり宗丹上座と称する
晩年この寺にて大法幸の弟子となり自牧と号す
小栗宗薫は宗丹のまなびし後相國寺を出て俗
家の畫　狩野大炊助正信は相列小田原の人なり狩野
して法橋に叙し東福寺の造営に近侍し画周文
の弟子にして世道の始めを東山殿金殿を作り宗丹
命じて障壁を畫しむ宗丹死して雪舟
未詳　雪舟はそのを伝へ後畫舟
有名なり　狩野の系列　狩野の津の高を甚だ
その屏風あり雪舟はもとより畫
小栗宗丹あり　雪舟人の画をうけ
の日本の

将軍家の障壁を指揮す大炊助と云人の畫をし雪舟来
りて日金殿の画宗丹を命じ功終りて死
甚だ後くの功者なり　狩野氏の子孫の近臣
中にあり云公の日有光の画を別命ドて書
つし甚筆法宗丹をあさむ一子元信後浮
至て画天下画工法長しして法眼の位を叙
元信の正信の長子なり雙の妙術をして遂に一家
を[illegible]法眼なる直信又法眼なるまで
古法眼と称して狩野の宗とする本書しこの
元信の画を不神妙にして和漢古今に比なきもの
その画のこと[illegible]大明に遣はされ鄭澤を法[illegible]
日本五百年来此品のある事をいまだ聞かず云

大職冠十二代 二階堂遠江守爲惠裔

藤原正信 大炊助 剃髮ノ私勢 又友清ニ作ル

法眼

義政公近習ノ侍

元信 雅名、四郎二郎 弟大炊助 任越前守 祝髮、永仙

法眼 拾古法眼、 古今ノ名画ナリ

義政公近習 士也 後上京ニ住ス其所ヲ今狩野

中興狩野家、祖ト云 辻子ト云

永祿二巳未十月卒ス年八十三

吉信 雅樂助 印二輪隱ノ字アリ

祐野 先テ父卒

季賴 治部少輔 先テ父ニ卒ス 眞笑 治部少輔

直信 民部 号松栄

法眼 三男ナレトモ惣領トノ

天正年中卒 齢八十

永德 源四郎

法眼

秀吉公ノ時聚樂大坂二城ノ大殿金壁ニ畫ク

元信存生ノ内ニ教ヘム又タクヒナク神品ニ入ル

天正六庚寅九月先父ニ卒ス年四十八

光信 右京進

治部国手法堂天井蟠龍畫

慶長七卒 年四十二

孝信 法眼 右近將監

治東南禪寺法堂天井蟠龍

治泉涌寺ノ賢聖ヲ畫

宗秀

宗也

休伯

當時狩野家續ヒ之

永真　法眼に至る　石京牧心斎　雅信と云　孝信の子
浅草寺の天井の蟠龍を画く
探幽　法印に至る　宋井　守信と云　孝信子
羅山文集に云寛永七唐千帖即位の書あり両使より
従ひ禁庭に入甚儀式を窮め書工狩野寄信に
命じ画せしむ中堂の天井の天人探幽探信
擬雪等の父なり　東叡山中堂の天井の天人探幽探雪
画く　石堂の十六羅漢　永叔探信探雪の二家なり
主馬　自適斎　尚信と云　孝信の子探雪の弟
是また石画なり　養朴　法印に至る迎又
青自斎　石川常信と云　法眼加川陶信隨川　本信の
父なり　今古信　郡信の祖父

永叔　法眼に至る　右京時信の子永真の孫
東叡山中堂の蟠龍を画く
特家　松栄直信　狩野家より枝葉並に法家なり
春雪信　大学氏信　休山清信　休碩友信等なり其
外名画多しなり
ぬ　法ハ夕月の人なり
多羽絵　僧正覚蔵　覚蔵西宮
左大臣高明公の孫なり天台の座主又三井寺の長史
浸　浸　甚浸
了　了　世よ　了ハ京正田全暇　了ハ人
僧秋月　諱ハ等蔵と云　薩摩の天寺の住僧なり
画い雪舟を師とし

紙所法師索之教い童朋し法師を遂し葉乃番乃
乃参の人し真継しを圓文の末子なり
義云所法　真継のをし志蔵しを絵をか法乃を
樹所法　志紙のをし志樹しを絵をか法乃を
僧雪村　禅い圓徳又鶴船斎しを住吉の一族にて
幸列　非紙の村田の人し雪舟の末孫なり
師牛の紙をるを式云雪舟西色しを雪村末孫
を指末西を合もを只書法を入て師牛し法

曽我流

勉足ハ越前の人武士し圓文を師とし
一休和尚し師禅の流あり大徳寺真珠庵
の方丈を画を志摩庵ハ一休開基也所のをし
代し書を善を曽我の紹叔ハ雅号し

曽我蛇足――宗丈――紹仙
宗誉――紹祥――今紹叔此裔ナリ

長谷川流

長谷川ハ等伯ハ狩野の能列の人し始ハ久左し云
雪舟五代し云
狩野堂流
八幡滝本坊服装の画なり
又平し云人書はをし土佐光信の弟
大津絵
ふしの人谷地の郷を画く絵しる云
深田絵
長谷川ハ義ハ吉兵衛し云人書をしひ之後
右衛門九郎ハ此流を学ぶ人沢在ハ懐月堂奥村正信ハ
なり足を京都ゆをいハ絵し云

全五冊

高橋修典
東海之

一の蝶流　吳一傑いと一流を書て源氏の巻々ぬい
御ぶとゝ云指野永さの才子ゑし
光琳絵　京尾形光琳ハ元禄ハ宝永ハ享保ハ
衣裳美麗ハ近年ハ
おるく絵　女画家いと六七歳のころ天性ゑを絵
して能ゝ習ひそして潔ら手跡まゝ亞くし
婦人衆心の掛ひあり今増上寺門前ゑ紙屋し
頂戴女画工ハ名ゑる
紅絵　浅草門前ハ朋町　和泉屋行平郎と云者ハ
のゝ〻奥絵　優ゝ絵を紅彩色ハて京傳のハ
寺ゝ奏　久達の彫ひ京師大坂後風ゑ
又ハ一の奏ゑて絵と云

巻之四軸